

ベーツ院長辞任の真相を探る

―『ベーツ日記』を手がかりとして―

池田裕子

I はじめに

一九九九年秋、C・J・L・ベーツ第四代院長（一八七七―一九六三、院長在任…一九二〇―四〇）のご子孫をカナダに訪問した際、ベーツ院長の日記が残されていることを知った。⁽¹⁾目にした日記はわずか数年分（一九三五年七月から恐らく一九四二年途中まで）に過ぎないが、メモ用紙一五〇〇枚にもおよび、家族のこと、オックスフォード・グループ運動のこと、関西学院のことなどが書かれていた。

日記が付けられていた時期は、日米開戦に向け、国内外の情勢が悪化する特殊な時代である。その頃の関西学院にとっての大きな出来事と言えば、ベーツ院長の辞任とその帰国ではないだろうか。ベーツ院長は、一九四〇年五月、自ら理事会に辞表を提出し、同年末日本を去ったのであるが、この事情は『関西学院百年史』に次のように説明されている。⁽²⁾

「一九四〇（昭和一五）年五月二六日、ベーツ院長は院長、学長、専門部長職からの辞任を理

事に申し出た。学院在任三〇年間、そして院長として二〇年間学院を育て導き、学生・教職員に深く敬愛されていたベーツ院長の突然の辞任申し出は学院の内外に大きなショックを与えた。続いて、六月一日アウターブリッジ法文学部長・専門部文学部長も辞表を提出した。(略)ベーツ院長の辞表提出をうけた理事会は、六月中旬に非公式の常務理事懇談会を開催して協議し、七月四日の臨時理事会において決定することにした。臨時理事会の冒頭、阿部義宗理事会議長が経過を報告、これをめぐって懇談がなされた。その後、ベーツ院長が出席、自ら辞表提出の理由を述べた。理事会はさらに種々討議したが、結局ベーツ院長の意思を受け入れることにした。アウターブリッジ部長の辞表提出も同様に慎重審議の末、承認することになった。ただ、両氏とも後任が決定するまでその職にとどまることが確認された」。

しかし、カナダ・メソヂスト教会(一九二五年からはカナダ合同教会)宣教師として、関西学院で二〇年間も院長を務め、教職員・学生から敬愛され、深い信頼を寄せられていたことで知られるベーツ院長の辞任が、本人の「突然の申し出」によりスムーズに受け入れられたとは信じ難い。何かあったと考える方が自然であろう。実際、ベーツ院長の辞任には神崎驥一先生が関係していたのではないかという声が、ベーツ院長を慕う卒業生からは今でも聞かれる。また、辞任を理事会に申し出た五月二六日は、ベーツ院長の誕生日である。ベーツ院長はわざわざ自分の誕生日を選んで辞表を提出したのだろうか。そうだとすれば、それにはどんな意味があるのだろうか。そこで、ベーツ院長の辞任に関する動きを、本人が書き残した日記から少しでも明らかにしたい。日記は、辞表提出の一年前に遡る(これより先、故人に関しては敬称を略す)。

Ⅱ 『ベーツ日記』

1 辞表提出前の出来事

〔一九三九年〕五月六日

卒業式で行ったスピーチについて、永井〔柳太郎〕氏と話をする夢を一晚中みた。これは私の潜在意識を表している。事態をこれ以上悪くしてはならない。同情を得たり、私自身の支持を得るために反目すべきではない。問題は、私がどうなるかではなく、関西学院で、日本で、あらゆる所で、神のご意志がなされるということである。今日、Kの所に行って半分話をする。

一九三九年の卒業式は三月一日午前九時に行われた。式次第によると、「讃美斉唱、聖書朗読、祈禱、勅語奉読、国歌斉唱、卒業証書授与、賞状及賞品授与」に引き続き、「学院長告辞」がある。この告辞の内容に関して何らかのクレームがつき、そのことをベーツが深く気にしていることがうかがえる記述である。

ベーツの夢に現れた永井柳太郎（一八八一—一九四四）は、「関西学院において人間を学び、早稲田大学において日本を学び、オックスフォード大学において世界を学んだ⁽³⁾」と語ったことで知られる政党政治家である。長年関西学院理事を務めると共に、この年の一月まで第一次近衛内

閣の通信大臣を務めていた。さらに八月末からも、阿部内閣の通信大臣兼鉄道大臣として入閣している。⁽⁴⁾普通学部の中学部への改称や大学(旧制)設置認可申請の際、文部省との交渉役としての永井の働きは大きかったと言われている。⁽⁵⁾

最後に出てくるKとは、この後の日記の記述から、神崎驥一(一八八四—一九五九)のことと推測される。

五月七日

昨日午前九時前、学校に行ったところ、真鍋〔由郎〕氏が残りの話をしに来た。事態は私が考えていた以上に深刻だ。永井氏は、報告されていることを私が言ったのなら、関西学院の理事を続けることはできないと言っている。真鍋氏は大いに困惑していた。彼は私のスピーチにはどこも悪いところが見当たらないと言った。それは彼が私の心を知っているからである。しかし、日中間の紛争は罪悪⁽⁶⁾(*zaiaaku*)⁽⁷⁾であると私が言ったと報告した人間がいる。私の意味するところは、極東における紛争の原因は東洋の国だけの罪ではなく、西洋も同罪だということだ。そして、世界には新たなスピリットが必要であるということだ——人生のあらゆる道に適用される無我のスピリットが⁽⁸⁾。

M〔真鍋〕は、N〔永井〕氏に情報を流したのは理事会の最も新しいメンバーである中村〔賢二郎〕氏だと考えている。それは事実であるように思われる。それがK〔神崎驥一?〕氏でなくて良かった。そんなことは問題ではない。私の死期が来たというだけのことだ。私にとって、キリストを賛美する良い機会である。神よ、私がキリストの霊を示すことができ

るようお導きください。私が戦争の犠牲になるとはおかしなものだ。だが、それならそれでよい。私は日本を非難したことはないし、するつもりもない。現状では、世界は日本の軍事行動を避けることはできない。私は日本を責めているのではない。それにしても、罪深い世界だ。日本だけの罪ではない。中国だけの罪でもない。アメリカにもカナダにもイギリスにも私にも罪がある。世界の罪を取り除く方法はない。悔恨と無我の新しいスピリットだけがそれができる。

これは、私のキリスト者としての証しである。これが私の言った意味であり、その責は負うつもりだ。

ベーツが亡くなった後、教え子たちにより「ベーツ先生思い出座談会」が行われた⁽⁹⁾。その中で、今田恵（一八九四―一九七〇）がここで問題になっているベーツの卒業式のスピーチのことを次のように語っている。「そうだね。国内情勢がああいうふうになると、外国人が院長をしているのはよくないという空気があったんでしょね。卒業式か何かの訓示のときに、戦争は罪悪であるとベーツ先生が言ったのが軍の関係者に伝わって、多少先生に迫ったこともあったようなことも聞いています」。

ベーツのスピーチの意味するところを曲解して告げたのがだれであるか、今となっては知る由もないが、この騒動の背景には関西学院の経営母体に関わる力関係が見え隠れする。

そもそも関西学院は、アメリカの南メソヂスト監督教会によって創立された小さな私塾のような学校であった。それが、一九一〇年にカナダ・メソヂスト教会がその経営に加わったことによ

り大きく発展することになった。しかし、カナダ・メソヂスト教会の経営参加は、南⁽¹⁰⁾美派（アメリカ・南メソヂスト監督教会出身者）とカナメソ派（カナダ・メソヂスト教会出身者）という対立関係を常に内在させることとなった。その対立は強烈だったようで、西川玉之助（一八六四—一九五四）は次のように書き残している。⁽¹¹⁾「加美・南⁽¹⁰⁾美両派の隠然たる勢力争ひもあり、時には確執の衝突もあり、常に虚々実々の外交戦が演ぜられ、昔のやうな他人交へぬ和やかさは望むべくもなかった」。

また一方で、外国人宣教師を募うグループと、吉岡美国（一八六二—一九四八）を代表とする日本人指導者を募うグループがあったことも数々の資料から感じられる。例えば、理事会の新メンバー中村賢二郎（一八八一—一九六九）は、日露戦争後、当時の吉岡院長に招かれて母校に帰り、自修寮という外国人宣教師の影響を受けずに生活する独自の寮を作って、その舎監を五年間務めていた。⁽¹²⁾しかし、「宣教師連中からは、寮生が受洗せぬという小言があり、私のやり方に文句がでた」と自ら書いている。⁽¹³⁾さらに、同窓会誌『関西学報』に掲載された宣教師や伝道局を批判する文章も問題となって、遂に一九一一年、関西学院を離れることになる。そんな中村を二七年後に理事として関西学院に呼び戻したのは永井柳太郎だったと言われている。また、高等学部が二学部に分離するに当たり、神崎驥一をアメリカから呼び戻したのも永井柳太郎であった。⁽¹⁵⁾この三人は、カナメソが学校経営に参加する以前の「古き良き関西学院普通学部」で共に学んだ仲間であった。中でも神崎と永井の結びつきは強く、後年永井の死に際して身内以外で最後に会ったのが神崎である。⁽¹⁶⁾創立時の関西学院は普通学部と神学部からなっていたが、それぞれの生徒は互いに対抗意識を持っており、それは南北両寮の対立という形にもなって表れた。そんな中、普

通学部生徒に慕われていたのが吉岡美国であったと言われる。同志社を退学した永井は、吉岡の温かい配慮により関西学院への転入を許されている。⁽¹⁷⁾さらに、神崎は吉岡の女婿に当たる。つまり、この頃の吉岡は既に学校経営に関わっていなかったし、ベーツも吉岡も決して派閥を作っていたわけでもないが、わかりやすく色分けすれば、この三人は南美派であり、吉岡派とすることになるだろう。

一九三九年二月に、ベーツの片腕とも言えるH・F・ウッズウォース（一八八三—一九三九）法文学部長が急死した時も、その後任をめぐって、勢力争いが繰り広げられた。⁽¹⁸⁾ベーツの院長としての最大の貢献の一つは、強いリーダーシップを発揮しながらも、常にこのバランスに気を配り、長年にわたって学内をひとつにまとめ上げていたことである。

ところで、この日、ベーツの相談相手となっている真鍋由郎（一八七三—一九三九）の立場はどうだったのだろうか。真鍋は、南メソヂスト監督教会の伝道地多度津で、宣教師S・H・ウェンライト（一八六三—一九五〇）に見込まれ、関西学院普通学部教員として招かれた人物である。「平素清貧に甘んじ、いささかも身の周りを飾ることなく、清廉潔白で、接する者をして自ら襟を正さしめられるような人柄であった」⁽¹⁹⁾ことで知られている。

したがって、強いて言えば南美派ということになるが、日記の記述からは、両者の間に立って心をくだいていた様子がうかがえる。ところが、痛ましいことにこの四カ月後、真鍋は阪急六甲駅で轢死した。ベーツはその死を大いに悼み、日記に次のように書き残している。⁽²⁰⁾「彼は六六才で、大変高潔で誠実な男であった。寡黙だが、非常に強い個性の持ち主で、長年中学部で教頭と中学部長を務めた。そして、教師や生徒たちに実に多大な感化を与えた」。

神崎にとつても、真鍋はなくてはならない人物であつた。後年、中村賢二郎は座談会の席でこう語っている。⁽²¹⁾「真鍋君が生きておられた時は理事をしておられましたが神崎君のよき相談相手でも何でも難しい問題があつたら神崎君は真鍋君に相談したことは真鍋君からの手紙で私は知っている。あの人がなくなられたことは神崎君に大変な損失であつたことは事実だ。^(ママ)あの人は神崎君のい、話し相手であつた。それに永井柳太郎もおつたが……」。

真鍋の急逝は、関西学院内の人間関係、力関係に微妙な変化をもたらし、ひいてはベーツの辞任にも影響を及ぼしたように思われる。

五月八日、月曜日

話は複雑だ。昨日、私は辞表提出について菊池〔七郎〕と亀徳〔一男〕と話をした。二人は辞任すべきでないと言った。もし私が辞任すれば、関西学院は大混乱に陥るだろうと言った。

エホバよ、どうぞ私をお導きください。

今日、神崎〔驥二〕と神代〔菊男〕大佐の所に行くべきだろうか。

ベーツは、日本人教員の中でも最も心を許していた二人に相談したものだと思われる。

菊池七郎（一八七七—一九五八）は、カナダ・メソヂスト教会宣教師R・C・アームストロング（一八七六—一九二九）の招聘により、関西学院高等学部教授となった人物で、関西学院の仁川移転話を持ち込んだことで知られている。⁽²²⁾大学設立が認可された際、ベーツの切なる頼みを聞

き入れ、予科長に就任したことからベーツとの結びつきの強さがうかがえる。⁽²³⁾

また、亀徳一男（一八九〇―一九七九）は、当時の礼拝主事で、堀峰橋副院長の後任にとベーツが考えていた人物である。関西学院神学部を卒業した亀徳を一九三四年に銀座教会から関西学院に招聘したのは、当時副院長としてベーツを支えていた曾木銀次郎（一八六六―一九五七）であった。⁽²⁴⁾

最後に神代菊男大佐であるが、当時中学以上の学校には陸軍現役将校学校配属令により、配属将校が派遣されていた。関西学院にも神代大佐の他に数名の配属将校がいたが、⁽²⁵⁾中には学校当局や学生に対して厳しい態度をとる者もいたと聞く。その一方で、着任後関西学院の校風になじみ、洗礼を受けてクリスチャンになり、軍籍を離れた後も職員として残った成川博大佐のような例もあった。⁽²⁶⁾

一九三九年五月九日、火曜日

昨日、神崎氏と話をした。とても明快な話し合いだった。院長は日本人であるべきだと理事会の日本人メンバーが感じていることは明白である。とにかく、神崎、中村、永井、真鍋、堀〔峯橋〕はそのように感じている。この問題が提議されればもっと多くの人間がそう思うだろう。そうすれば、宣教師の中にも賛同する者が出てくるだろう。私自身もそうである。私は、永井に伝えられた報告が間違いであったことはつきりさせた。スピーチの英文原稿と和文原稿の両方を彼に読んで聞かせた。

今、問題なのはどのように進めていくかということだけだ。重要なのは、学校に混乱を起こさないようにすることだ。そうすることは難しくはないだろう。純粹な愛と無我の信念を広める時である。私は長期間ずっとやって来た。ただ、できるだけ上品に手を引くべき時が

来ただけだ。

今日、理事会が行われる。私は、私自身を理事会に委ねて声明を発表しよう。

「こんなにも長くここで働くことを許されたのは大変名誉なことでした。学校経営に当たり、同僚の皆さんが示してくださった誠実なご協力とご支持に対して深く感謝いたします。仲間の引退や死去により、私自身の残りの時間が少なくなりつつあるのを感じるようになりました。神のお導きのもとでなされる理事会の判断により、最も学校のためになると思われる時に、理事会がいささかも遠慮することなく私の後任を求め、任命してくださることを望みます」。

これまでのところ事態はこのように進んできたので、問題は、学校に迷惑をかけずに引退するにはどうすればいいかということだけだ。KGの五〇年に及ぶ歴史の中で、吉岡〔美国〕先生は二三年間院長を務められた。私は一九年で、「J・C・C」ニュートン先生は六年、⁽²⁷⁾松本〔益吉〕先生は院長代理として一年ほどだった。

父よ、今や私の時間は終わろうとしています。この時こそ、私の内なるキリストをあがめさせてください。聖霊の働きが十分にあって、私の考え、言葉、行動をお導きくださいますように。非難の言葉を口にしませんように。さもなくば、恨みの言葉を私の唇から取り去ってください。私はここで働くという素晴らしい機会を与えられました。私が関西学院で働くのと同じ位誠実に神に仕えていたなら、こんなに長くここに留まるべきでなかったのかも知れません。そうすれば、私には霊的に示すべきものがもつとあったかも知れません。

「くるあさごとに　とるわがつとめ

ひとをあいして おのれにかたば

神にちかづく みちとこそなれ⁽²⁸⁾

私が関西学院に留まる間、はつきりと力強く証言することができるよう助けてください。

イエスとその愛の話をするため、また、キリストの証人としてあらゆる機会を利用することができるよう助けてください。私たちの生活の中で、神がきわめて重要な存在であり、力であることを十分に知らせることができるよう助けてください。その事実を私の毎日の暮らしと働きの中で、明らかにすることができるよう助けてください。

終わりはいつかやって来るに違いない。恐らく五〇周年の記念式典に合わせるのがいいだろう。そうすれば、次の五〇年と共に新たな経営体制が始まると日本人は思うだろう。神よ、私をお導きください。神の栄光いやまさんことを。

曖昧なままにしておけないと感じたベーツは、神崎驥一と直接話をした。神崎は、自分を含めた日本人理事の考えを説明したようである。卒業式のスピーチ自体に問題はなかったことを確認したベーツは、その考えを知って院長辞任を決意する。

しかし、この時の理事会記録にはベーツの院長辞任に関する記述はない。だが、ベーツがこの日の日記に書いている声明を理事会の席で述べたことは、後に出てくる曾木銀次郎との会話からも明らかである。また、三月の卒業式で行われたベーツのスピーチが問題となったことも理事会記録には残されていない。

「仲間の引退や死去により、私自身の残りの時間が少なくなりつつあるのを感じるようになり

ました」とベーツは書いているが、実際ここ数年の間にカナダ合同教会の宣教師は大きく入れ替わっていた。具体的に言うと、ベーツの片腕とも言えるH・F・ウッズウォースが、ベーツより若いにもかかわらず、この年の二月に急死している。⁽²⁹⁾ W・J・M・クラッグ（一八七三—一九四〇）は、病気を理由に辞職を申し出ていた。⁽³⁰⁾ 長らく理事としてベーツを助けていたD・R・マツケンジー（一八六一—一九三五）は既に亡く、D・ノルマン（一八六四—一九四一）も一線を退いていた。さらにこの半年後には、M・M・ホワイティング（一八八五—一九五五）が病に倒れることになる。⁽³¹⁾ このように、長年苦勞を共にしてきた仲間が次々と去り、また、外国人に対する風当たりも強くなりつつあるという、今までと比べれば、やや孤立した状況にベーツが置かれていることは確かであった。

このような状況を捉えて、ベーツを追い出そうとした人間がいたとは考えたくないが、この時期、日本人理事の中に、院長は日本人であるべきだと考え、行動した人間がいたことは事実のようである。

一九三九年五月一日

理事会は実に平穩に気持ちよく終わった。私は投票によって選ばれた特別な委員会で亀徳氏を副院長に指名した。ところが、委員会は今のところ何の行動も起こしていない。理由として示されたのは、副院長と礼拝主事を結びつけるのは賢明ではないということと、少なくとも私は副院長をそんなに必要としていないことである。神崎氏の表向きの反対理由は、副院長と礼拝主事を合体させるのは賢明ではないということだが、本当の理由は、今私

の副院長指名を承認すると、副院長のサポートを得て院長職としての私自身の立場がゆるぎないものとなり、副院長に指名された若い人間が院長の資質ありと証明されたことになるかも知れないからである。

とにかく、堀、神崎、真鍋の古いKGグループは、私が辞めるべき時だと結論を下していることは事実である。今や、その時期と方法が問題だ。この仕事を始めてからこの秋で一九年になる。だから、この過酷な取り扱いに文句を言うつもりはない。彼らは長い間私を悩ませてきたし、もっとよく扱ってくれていた。「切りましょう (Kirimasho)」⁽³²⁾。

ベーツが推薦した亀徳は、結局副院長に就任することはなかった。礼拝主事を続け、後に学監を務めたが、戦争末期の人員整理により辞職した。この間の事情を亀徳自身は後年、次のように語っている。⁽³³⁾「神崎は」理事会で私の副院長の問題で三回も反対を言った。ベーツさんがもうちよつとがんばれば僕だつてと、「僕は」ベーツ先生にそういうことを言った。僕とあなた「神崎」とは合わないからここはと、色々なことを話して、学院のためならということ、水に流してやりましょうということ、で、「学監を」することになったのだが……」「自分で否定していた人間を学監に選んだのが全くの失策だったね」「戦争中、」学校のため色々な粛正をやらなければならないので、先生方を整理する。教授方を整理するためには、本部がまず範を示さないとけないというので、それが僕の所に来た」。ここで亀徳の言う「粛正」とは、一九四四年に、全教職員に辞表を提出させた事件のことである。当時の神崎院長は、その内三二名の辞表のみ受理し、他の辞表は返した。業績主義の神崎は、業績のない教職員の辞表をそのまま受理したと言わ

れているが、自分に合わない教職員の辞表のみ受理したという見方もある。⁽³⁴⁾

一九三九年三月に定年を迎えた堀峯橋⁽³⁵⁾（一八七三—一九四五）は、一八九六年に関西学院神学部を卒業後、各教会の牧師を歴任していたが、一九二〇年に関西学院の礼拝主事となり、三五年から定年まで後述の曾木銀次郎の後を受け副院長を務めていた。⁽³⁶⁾

〔九月二七日、〕水曜日

（略）

月曜日の朝、曾木〔銀次郎〕先生が来られて、私が辞任すべきかどうかについて話をした。彼はとても同情的で、先の理事会で、私が最も学校のためになると思われる時にいつでも辞任する用意があると述べたことで十分だと考えていると言った。騒動は続いている。神崎、中村、堀は仲間だ。他に表に出ている人間はいない。しかし、他にもいるだろう。原則的に、日本人がKGの院長であるべきだと考えられている。国事に対して、もっと積極的にリーダーシップをとるという感覚が彼らには欠けていると思う。

カナダ・メソヂスト教会で按手札を受けた曾木銀次郎は、同教会が関西学院の経営に参加したのを機に神学部教授に就任した人物である。⁽³⁷⁾ ベーツとは、その東京時代から親しく、松本益吉（一八七〇—一九二五）副院長急死の後、ベーツの依頼を受けて一九三五年の定年まで副院長を務めた。⁽³⁸⁾ ベーツにとっては、常に最も身近で支えてくれていた日本人の一人であった。

〔一月二十六日、〕 日曜日

(略)

昨日の午後、原田〔修二〕教授と河辺〔満甕〕教授がやって来て、学校の福利厚生について話をした。そして、私に引き続き積極的なリーダーシップを発揮するように励ましてくれた。彼らは全面的なサポートを約束し、定年退職の時まで辞任しないよう熱心に説いた。

原田修一（一八九三―一九五七）、河辺満甕（一八九七―一九七〇）の温かい励ましを受けて、ベーツはどんなに嬉しかったことだろう。二人はベーツが手塩にかけて育てた高等学部の卒業であった。帰国の直前、ベーツ館二階に招き入れられ、“Keep this holy fire burning”という最後の祈りの言葉を託された愛弟子（他に寿岳文章も）の内の二人である。⁽³⁹⁾

ベーツがひとつの区切りと考えていた関西学院創立五〇周年記念式典は、この年の一〇月十四日に挙行されている。日記には、ベーツが院長として日本語でスピーチをしたことや、来賓のことが書かれている。また、記念式典の二日前にはラジオ出演し、「三七年間の教育経験」と題して約二〇分間の話をして⁽⁴⁰⁾いる。

2 辞表提出

〔一九四〇年〕五月二十五日

神よ、学校の靈的生活を傷つけることなく、この細心の注意を要する状況をくぐり抜けて行くことができるようお導きください。私が、正しい時に正しい行動をし損なうことのないよう、日々、刻々となすべき事をお示しください。神よ、私の心を清め、私に汝のご意志を誠実に実行させてください。

一九四〇年五月二六日〔辞表提出〕

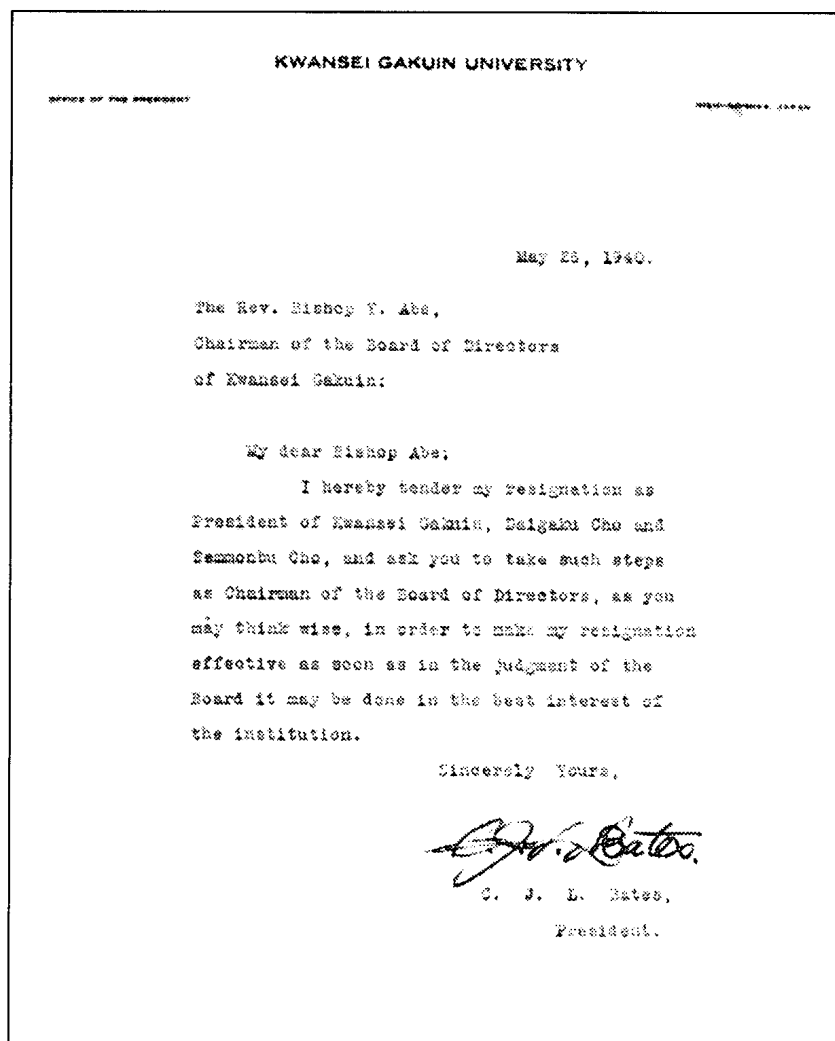
六三才の誕生日。

今朝、私は心の中に流れる讚美歌 “All the way, my Saviour leads me”⁽⁴¹⁾ と共に目覚めた。神よ、約束をお守りくださったことを感謝します。ハワード〔・アウターブリッジ〕とエドナ〔・アウターブリッジ〕が、同じように元気づけられますように。もし、H〔堀?〕がガイダンスによるグループの考えを拒絶しなかったら、彼が犯したような過ちを犯すことはなかっただろう。他人のガイダンスを得るために相談しただろう。それはK〔神崎?〕も同じだ。これは嬉しがることでも、まして自慢することでもないが、M R A（道德再武装）運動の考えはこの経験を通じて再認識された。「しかし、私はおまえに言う。抗議したり傷つけたりすべきではない」。

これは、今日のためのオールダムの教訓である。⁽⁴²⁾

自らの誕生日にベーツは辞表を提出した。辞表の文言は次の通りである。簡潔な文面からは、ベーツのこれまでの苦悩をうかがい知ることはできない。しかし、ベーツが意図的に誕生日（し

ベーツ院長辞任の真相を探る



【C. J. L. ベーツの辞表】

かもこの日は日曜日）を選んだことはもはや疑いようがない。そこには、定年（六五才）まで関西学院長として留まりたかったというベーツの本心が凝縮されている。

また、この日の記述からは、当時オックスフォード・グループ運動から道徳再武装運動へと発展した運動に、ベーツが熱心に取り組んでいたことが読みとれる。実は、ベーツの日記のかなり部分がこのグループ・ミーティングの記録となっている。

3 辞表提出後の動き

一九四〇年六月一九日

昨日の朝、「W・K・」マシユース氏がやって来て、一昨日神戸のパルモア学院で秘密裡に常務理事の懇談会が開かれ、私の辞任について話し合われたと告げた。出席者は阿部〔義宗〕、「E・C・」ヘニガー、マシユース、「J・J・」ミツクル、「H・W・」アウターブリッヂ、神崎〔驥一〕、曾木〔銀次郎〕、菊池〔七郎〕だった。話し合いの後、現在の国内外の情勢下では私の辞任を承認するのが賢明であろうという結論に達した。神崎氏が私の後任となることも間違いない。その夜、私が彼を指名すべきだとの考えが浮かんた。私が信じるのは神のお導きのままにということだ。もし私がそうして、各部長が全て彼を支持すれば、大きな反対はないだろう。私がそうしなければ、問題が起こるかもしれない。

しかし、彼であろうと他のだれであろうと、任命されれば温かく歓迎されるべきである。最初の学期の終わりに変化が起こると思う。ハワード〔・アウターブリッヂ〕と私は同時に退職すべきだ。

二〇年間この地位で働いたことは大変な名誉であった。きっぱり辞める時が来たのだ。〔定年の〕一九四二年まで続けたいと思っていたが、今が辞める時だ。罪をかぶる人間が必要なら、ヒットラーのせいにする⁽⁴³⁾ことができる。

吉岡〔美国〕先生の所に行つて、話をすべきだろうか？ 恐らく後で。今日の午後、私は財務委員会の通知を作らなくてはならない。

内密に開かれた常務理事懇談会の様子をベーツに知らせに来たW・K・マシユース（一八七一—一九五九）は、南メソヂスト監督教会宣教師で、一九〇四年以来関西学院で教鞭をとっていた。ベーツとは実に長いつきあいで、関西学院における南メソヂスト監督教会とカナダ・メソヂスト教会の共同経営の可能性について、ベーツに初めて話を持ちかけて来た人物でもある。それは一九〇八年の夏、軽井沢のことだった。⁽⁴⁴⁾ベーツはマシユースのことを「三〇年来の大切な旧友」と書いている。⁽⁴⁵⁾

一九四〇年七月四日、木曜日

「独立記念日」—アメリカ植民地が独立を宣言した日—が、比喩的に言えば、ハワード「・アウターブリッジ」と私がギロチン台に行く日となった。本日理事会が開かれ、恐らく私たちの辞任が承認されるだろう。それならそれでよい。昨日、神崎氏が私に会いにやって来て、一時間ほど語り合った。彼は本当に真面目に現在の国内外の状況や趨勢を憂えていた。まるで、関西学院長の重荷を彼が担うよう命じられることになっているかのようだ。彼はそれに対して謙虚である。彼は断らないだろう。だが、彼は学内外に困難が待ち受けていることを知っている。彼はある程度の責任を担ってきた。けれども、最終責任を負ってきたわけではないので、そんなに困難ではなかっただろう。彼と私はずっと一緒に働いてきた。時には意見の相違もあった。しかし、決裂にまで至ったことはない。彼の行動は、多くは学校のためになされてきたのだ。

甲子園ホテル、午前一〇時。

理事会が開催された。出席者一九名。次の三件の事項が取り扱われた後、

- 1 柏井〔象雄〕助教授の商経学部への任用
- 2 学生主事の職制の定義
- 3 教員の夏期賞与

阿部〔義宗〕議長によつて朗読された辞表について説明を求められた。それから、アウターブリッツヂ氏も辞表について説明を求められた。私たちはそれぞれ説明した。

私は三つの理由を述べた。

- 1 引退すべき時がきたので、後任に関する事項を取り扱う機会を理事会に与えたい。
- 2 政府関係者とクリスチャン・スクール間の緊張の高まり。
- 3 国際的な緊張の高まり。

議長は午後二時まで、二時間半の休憩を提案した。午後二時、理事会は私抜きで継続審議を行なった。私の件が検討されている間、私は「すっかり嫌われて」放っておかれた。三時半にマシユースが呼びに来た。私はぐっすり眠っていた。私は呼び戻されて、辞任は承認され、後任が任命され、正式に承認された時に効力を発するとの報告を受けた。その時、〔S・E・〕ヘーガー氏は、親切過ぎて鼻につく、熱のこもった私への感謝のスピーチを行った。私は、ただ大いなる感謝を持って受け止めるだけだ。神崎の提案で、⁽⁴⁶⁾理事会を代表する四名に、各部長とスクール・カウンセシルによつて選ばれた各学部一名の代表を加えた委員会が、辞表を受理し、私への感謝の意を表わす方法について検討することが決議された。

「まあ、そういうことだ……」

次に、「I・L・」シェーバーが提案し、A・P・マッケンジーが支持して、アウターブリッジの辞任が承認された。賛否両論だった。山本〔五郎〕と菊池〔七郎〕によって、この動議を延期する修正案が提出された。これは否決された。最初の提案が通り、アウターブリッジの辞任が承認された。

かくて世の栄光は移ろいゆく。関西学院における時代は終わりを告げた。

ここで指摘しておきたいのは、臨時理事会の前日に訪ねて来た神崎驥一に対するベーツの記述が冷静なことである。ベーツは、神崎が関西学院のために働いてきたことを理解し、その能力を正當に評価している。一方の神崎もベーツに礼を尽くしている。自らの辞任を受け入れるに当たり、確かにベーツは傷つき、悩み、苦しんだ。しかし、関西学院を思う気持ちは両者共通である。二人は二〇年近く力を合わせて働いて来たのだ。ベーツも神崎も、最終的にはお互いを理解しており、わだかまりはなかったと思われる。

理事会で、アウターブリッジの辞任決議延期を求めた山本五郎（一八七八―一九六九）は、東京大学法科の卒業で、関西学院大学法文学部創設に当たり、H・F・ウッズウォース法文学部長が協力を求めた人物であった。⁽⁴⁸⁾この後紹介する中村賢二郎の文章からもわかるように、理事会では菊池と共に、ベーツやアウターブリッジなどカナダ人宣教師に対して同情的な発言をしている。

七月四日の臨時理事会の様子は、後に『母校通信』⁽⁴⁹⁾に発表された。紹介したのは、ベーツが「神崎、堀の仲間」と考えていた中村賢二郎である。ただ、中村は七月四日と九月一日の理事会を混同して書いている。そこで、ここには七月四日の理事会の様子だけを抜粋する。

「理事会では暑熱の中に熱烈な論議が行はれた、今日尚、母校にあつて経済倫理を講じてをる山本五郎君はこの辞職問題の背後に政府当局の圧迫があるのではないかと論じ、嘗ての大学予科長で、永く病床にある、菊池七郎君は、後二年で、ベーツ氏は停年退職する人であるから、それまで留任して貰ひたい、しかし、引きとめるのが人情であり、亦日本武士道の本念であると述べた。丁度其頃、帰国を前にして理事会に参会した原田村時代の普通学部長、ヘーガー氏は熱烈なる英語を以て、メソヂズムの本質を論じ、ウエスレーの信念を説き、同一人が永く同職に留まるべきでない、ベーツ院長は学院に対し、今日まで十二分の義務をなし果したものであると、永く広島女学院長であつたミス・ゲンスが日野原善輔君（普通科第四回生）に後を譲つて帰国した例を引き、大に辞職承認をバックした。私は元来無為無策の男で、理事会では北浜〔留松〕君と同じく無言居士で終始したのであるが、この時ばかりは一席喋つた、史実として母校は原田村の土地を坪一円で買つて生れたものである。それを四十年の後、三百数十万円の大金で阪急に売り渡し仁川移転を敢行した。このことは何を物語るか、これを以て単なる投資的賢明さに帰するものはあるまい、創立者〔W・R・〕ランバス博士は、そんな惻口者ではなかった。しからば、今日の盛大なる母校を作つたものは何であるか、即ち日本の国力である。この国力の御蔭で移転もできたものとみるべきである。今やベーツ院長退職するとしても、この国力の下にあつて日本人が経営をなしえない筈はないと所信を述べた。

理事会の議長は、元青山学院長の阿部義宗君であつた。辞職問題と言うものは取扱にくいもので、特にベーツ氏の如き内外人に愛敬せられていた人物の問題だけに皆々困り果てたので、涼しい甲子園ホテルも一層あつくろしいものになった、議論も余り出ないので採決となつたか、日本

人二名の反対投票でベーツ院長の辞職は承認された、引続いて当時の法文学部長であったアウターブリッジ博士やミツクル会計課長の辞職も採択せられた〔ミツクル会計課長の辞職は九月の理事会承認事項〕。

午前一〇時に始まった臨時理事会が、全ての討議を終え閉会したのは午後六時であった。⁽⁵⁰⁾

一九四〇年七月七日、日曜日

何とも話は複雑怪奇だ。昨日、学生が舞台に登場した。学生会の代表三名、商学会長、文学会長、その他の者が私に話をした。これら正式メンバーは、理事会が私とアウターブリッジの辞任を承認したことに抗議するため、各理事の家を訪ねるつもりである。商学会長は、HCS（高等商業学校）専任の校長を要求した。そして、現校長〔神崎驥一〕は学生に大変嫌われていると言った。また、文学部（専門部）の教員は協力して、アウターブリッジは文学部長を続けるべきだと要求している。彼らの内の八人は昨日集まり、アウターブリッジの辞任は許されないと要求している。さらに、全学生は集会を開き、院長への忠誠を誓った。この騒動の渦中から降りることは、日中問題の解決と同じくらい困難なように思える。近い将来、K〔神崎驥一〕が最高職位を継ぐことが全く不可能であることは非常に明白だ。彼はこの辺りで最も不人気な男である。彼に対する批判は、あまりに頑固で、あまりに金好きであるということだ。

法文学部の教員は何も言って来ない。彼らは明らかに変革を求めている。私に回ってきた提案は、

- 1 日本人の学部長とすること。
- 2 学部長は法文学部で選出されること。
- 3 交代制をとること。

この翌日、ベーツはカナダ・ケベック州に住む娘夫婦に宛て、辞任を知らせる手紙を書いた。⁽⁵¹⁾ その中で、七月六日と七日に、辞任撤回を求める学生に取り囲まれたことを伝えている。小林信雄名誉教授は、文学部（専門部）一年のクラス代表として院長室を訪れたメンバーの一人だったそうである。⁽⁵²⁾

ベーツは、翌年夏までは関西学院にいて、その後東京で一、二年過ごしたいという希望を娘への手紙の中で述べている。関西学院でなくても、定年（一九四二年）まで日本にいられると考えていたのである。しかし、実際にはこの年の終わりに日本を去っている。つまり、日本を取り巻く世界情勢は、ベーツの予測をはるかに越えたスピードで悪化して行っただけである。

そこで、ベーツの辞任・帰国を世界の動きの中で考えてみると、第二次世界大戦はこの前年九月、既にヨーロッパ大陸で勃発していたが、アメリカはヨーロッパ戦不介入中立の立場を表明していた。しかし、「ドイツが勝利を重ね、日本の動きも活発になるに従い、これらの国々への姿勢も厳しくなっていくた⁽⁵³⁾」。そんな中、国際連盟脱退以来その接近が予測されていたものの、日本海軍首脳部の反対等により挫折していた日独伊軍事同盟が、締結に向け急速に動き出す。そして、「日米関係をいたずらに悪化させる結果をもたらした⁽⁵⁴⁾」と言われる日独伊三国同盟がこの年の九月二七日に締結される。つまり、情勢が一変したのはこれ以降である。辞任が承認され、娘

夫婦に手紙を書いた七月初めの時点で、このような急激な動きを予想することはベーツには不可能であつたろう。実際、秋以降の変化は加速度的で、「九月には基督教教育同盟加入の諸学校の会議でミシヨンからの財政的独立の方針が申し合わされた」⁽⁵⁵⁾。一〇月になると、ベーツは東京で宣教師仲間とカナダへの帰国について長時間話し合っている。カナダ公使からは、女性と子どもに対する引き上げ勧告が出されていた。「帰国したくないが、勧告に従わないわけにもいかない」とベーツは書いている。⁽⁵⁶⁾十二月の理事会では、学校の行政機構および財政に関して、外国との関係を絶つことが正式に決議された。⁽⁵⁷⁾そして、この年の終わりにベーツは日本を去つたのである。

以上の点を考え合わせると、一九四〇年五月の時点で、国内外の情勢悪化を理由にベーツが自発的に辞表を提出したとは考えにくい。むしろ、前年の卒業式における院長スピーチにまつわる騒動がきっかけとなって明らかになった日本人理事の考えを尊重して、ベーツは辞任を申し出たというのが真相であろう。

一九四〇年七月九日、火曜日

今、私たちは高山に向かっている。二カ月間、KGとそれに関する心配事は忘れなければならぬ。

高山（宮城県）には「高山外人部落」という外国人宣教師が夏を過ごす別荘地があつた。⁽⁵⁸⁾ベーツ一家は毎年ここで夏の二カ月を過ごしていた。「辞めないで」という学生の声はこの避暑地にまで届けられた。当時高等商業学校三年に在学していた安枝修三氏からの手紙に対してベーツは

七月三十一日付で返事⁽⁵⁹⁾を書き送っているが、三つの辞任理由（1・六三才という自分自身の年齢、2・国内のクリスチャン・スクールの中で自分が唯一の外国人院長であること、3・国際関係の困難な時代にあつては日本人院長の方が好ましいと思われること）を説明し、実の息子のよう^{した}に思っている学生から示された愛情に対する感謝の気持ちを認めている。ベーツの元には、この他の学生からも手紙が送られて来たことだろう。

結局、神崎驥一は、一九四〇年九月十一日の理事会にて、満場一致で第五代院長に選任された。この理事会にはもちろんベーツも出席していた。中村が『母校通信』に書いた文章の中で、この時の理事会に関わる部分は次の通りである。

「しかして、高松出発前、東京の永井柳太郎君からきた速達を読み上げた、後世歴史編纂者のために後考材料として其の書信を書きのこしてをこう。

故永井柳太郎理事の書信

『来る十一日臨時理事会開催の件マシユース氏より通知有之候も小生は目下開催中の新体制準備委員会のため出席難く就ては大兄が出席の節は―何卒御出席下され度く―次の数項を理事会に御伝達煩はし度奉願候。

- 1 財団が関西学院をして今日あらしむる迄に努力し、且莫大なる犠牲を惜まざりし事実に対しては、衷心より感謝を禁じ得ず、然し、学院が日本国に於ける教育機関にして、日本国家の教育方針を尊重せざるべからざる本質に鑑み、学院の教育を指導し、且学生を訓育すべき重要な地位に在る院長、並びに各学部長は凡て日本人中より其の適任者を選ぶべきである。
- 2 外国人は外国語、外国文学、外国研究等の特殊学科のみを担当すべきである。

3 学院は仮令其設備を低下し、当分各種の不自由を忍ばざるべからずとするも、其財政の独立を期すべきである。^{「マ・マ」} ミシヨンよりの寄附金に依存することは謝絶すべきこと。

4 右の方針を決したる上は、学生並びに其の父兄を集めて其の次第を報告し、彼等に精神的並びに物質的協力を求むべきである。

右の趣、特に外国人の理事諸君に十分理解せしめられ度御願申上候、不取敢貫意を得度如此に御座候

九月一日

柳太郎

二白、去る八月二十日神戸の友人の葬儀に参列のため下神、トーアホテルに滞在中少閑を得て学院並びにベーツ院長宅へ自動車を飛ばしたるに、何れも一人の人影も見ず、初めて学校の先生方には暑中休暇なるものあることを思出し、今更ながら吾々とは大分違ったのかな世界あることに苦笑したり、呵々』。

さて、後任院長の選挙については、院の内外、噂とりどりで、福音主義の原田村時代を遠く後ろに見捨てて、官学の後を追うて発展を期せんとする近代資本主義化の下にあつては、創立者〔W・R・〕ランバス博士や吉岡美国先生の如き人物の発見は、到底至難のことであつた、其間、日本人理事の会合を六甲ハウスで開催するなど故尾崎和夫理事は大につくしてくれた。私としては、永井君の如き大物を引張つて来てはと意見を述べ、皆も大賛成であつたが、永井君は早稲田でも、総長として押されたが拒否して受けなかつたとのこと、彼は教育を愛せざるにあらず、寧ろ自分の最も欲する聖職であるが、国難を前に控え、国家危急存亡の秋に際し、中央政界を去ることは義に於てしのびざるところであると言つて、彼は神崎君を院長に推挙したのであつた」。

この永井の書信を裏付けるかのように、一九四〇年度より、理事会記録は英語ではなく、日本語で書かれている。また、神崎自身も後年座談会で次のように語っている。⁽⁶⁰⁾「昭和一六年にわたし院長になりました、その時は戦争前でもあったし、日本の経済条件もよかった。それで外国からのご援助はお断りしようということで、私など率先して主唱した方なんです」。

一二月三〇日、ベーツが神戸港からカナダに向けて帰国する時がやって来た。ベーツ夫妻が迎えるの車に乗り込むと、車はそのまま神戸港には向かわず、正門から構内に入り、中央芝生の周りをゆっくり一周した。車が各建物の前を徐行する度に、教職員、学生が飛び出してきた。最後に校門を後ろに去っていく時、ベーツは目に涙をため、何度も何度も振り返ったと言う。⁽⁶¹⁾神戸港での見送りは夕刻であった。身を刺すような寒風の中、校旗を先頭に関西学院の学生・生徒、卒業生、教職員が埠頭にあふれかえり、とても華やかな見送り風景であったと伝えられている。船上で、日の丸の小旗を振って見送りに応えるベーツの写真が残されている。

翌三一日付けの日記にベーツは次のように書いた。「昨日午前一〇時三〇分に神戸までやって来ると、出航時刻が午後二時から七時に変更になっていることがわかった。そこで、オリエンタルホテルに行き、午後四時まで広々とした二六号室で御前会議を開いた。⁽⁶²⁾（略）午後四時、船に行った。（略）夕刻、私たちは最高の見送りを受けた。学校中の教職員、学生・生徒が来ているようだった。MS（中学部）の吹奏楽部員は、午後一時から七時までそこにいて、校歌や「神ともにいまして」や「君が代」や「蛍の光」を演奏してくれた。すばらしい演奏だった。（略）私は人混みの中を歩き、大勢の人と握手した。（略）それは感動的な見送りで、嬉しい出来事であった」。

Ⅲ おわりに

一九三九年から翌年にかけての院長交代劇の真相として、ベーツが書き残した日記とその関連資料から明らかになった点を整理すると、次のことが言える。

- 1 ベーツが辞任を決意したのは、辞表提出の一年前（一九三九年五月）である。
- 2 ベーツは六五才の定年（一九四二年）まで院長を務めたいと思っていた。
- 3 院長は日本人であるべきという考えを持つ日本人理事のグループがあった。
- 4 ベーツは、緊迫していく国内外の情勢の下、自らの考えで辞表を提出したというより、そのような日本人理事の考えを知って辞任を決意したと言うべきである。
- 5 一九三九年三月の卒業式における院長スピーチの内容を誤解して永井柳太郎に伝えた日本人理事がいた。
- 6 関西学院の経営に関し、永井柳太郎理事の発言力が大きかった。

このように書き出してみると、これらの事実が院長交代劇の真相の一部であると同時に、関西学院の米加両教会からの自立への動きを示すものであることに気付かされる。私たちがこの自立問題を考える時、戦争、特に太平洋戦争との関連で議論を進める傾向が強い。また、ともすれば両教会をめぐる関西学院内の人間関係の方に目を奪われがちである。それらは確かに大きな影響

を及ぼしたであろう。しかし、関西学院の日本人による経営、外国の教会からの自立に向けての動きは、それらとは別の次元で既に進み始めていたというのも見逃してはならない真実ではないだろうか。

ところで、日記に限らず、ベーツの個人的文書に目を通して見て最も感銘を受けるのは、ベーツの逆境時の心の持ち方、身の処し方である。自分の希望と異なる現実や決定に直面した時、それらを素直に受け止め、前向きに考える強さをベーツは持っていた。

ベーツの来日は一九〇二年であったが、そもそも本人は日本ではなく、中国を希望していた。東京の中央会堂で前途有望な青年たちを指導し、成功をおさめていたにもかかわらず、関西学院へ赴任の命を受けた。東京の本郷で活躍していたベーツの目に、摂津国菟原郡原田村字王子の大根畑に囲まれた小さな学校はどのように写ったであろうか。関西学院で創設に関わった高等学部が発展の兆しを見せ始めると、再び東京に呼び戻された。その後、院長に就任してからも様々な試練に直面した。まず、自分の健康に絶対の自信を持っていたベーツが二度も大病に見舞われる。その内の一度は、死を宣告されカナダに帰国している。また、妻も病で言葉と半身の自由を失った。そして、定年まであと二年を残しての院長辞任である。これら人生の転機とも言える場面で見せた純粋さ、強さ、謙虚さ、明るさこそ、多くの教職員、学生に慕われたベーツの人間的魅力であろう。

現在、『ベーツ日記』のタイプ起こし（ワープロ入力）作業が進められている。ベーツの手書き文字には力強い美しさがあり、それ自体、目にする者の胸に迫ってくるものがあるが、やはり読みにくい。全て活字化されればもっと色々なことがわかるようになるだろう。辞任の真相に関

しても、私が読み落としていた事柄が見つかるに違いない。

これまで目を通した限り、ベーツは言いたいことや感じていることを素直に日記に表していると思う。それは、メソヂストの祖であるジョン・ウェスレーにならない、自分の行動や考えを包み隠さず神に報告するという意味もあつたであろうが、冷静に自己を見つめ、心のバランスをとるためにも必要な作業であつたろう。したがって、過激に感じられる表現があつたとしても、それをベーツが表に出すことは一切なかったに違いない。また、幸運にも日記を読む機会を与えられた私たちは、これは公表する目的で書かれたわけではない個人の日記であることを心に留めておく必要がある。したがって、その記述は、ベーツの目から見たある意味一方的なもので、たとえ以前書いた内容の間違いに本人が気付いたとしても、遡って訂正することはまずないと考えなければならぬ。

それにしても、人間の営みは、時計の振り子のように左右に揺れながら進んでいくもののようにだ。関西学院において、二〇年間カナダ側に振られていた振り子は、一九三九年から四〇年にかけて神崎側に大きく動いた。戦争を経て、その振り子が反動のため振り戻されたのは当然のことかもしれない。

謝辞…『ベーツ日記』の解釈に当たっては、帰国直前のご多忙な時にもかかわらず、文学部のジュディ・ス・ニュートン教授から数多くのご教示をいただきました。また、ブリティッシュ・コロンビア大学出版局のカミラ・ジェンキンズさんも、私の疑問に答えてくださいました。お二人のご協力に感謝します。さらに、日記を読む許可を与えてくださった上、長期にわたりお貸しくださっているスコット・ベーツ氏にも心からお礼を申し上げます。

【注】

- (1) 池田裕子「カナダ訪問記―C・J・L・ベーツ第四代院長関係資料調査の旅―」『関西学院史紀要』第六号、二〇〇〇年、一六五―一六七頁。カナダから帰国後、ご曾孫スコット・ベーツ氏のご好意により日記をお借りすることができた。日記の記述から詳細が明らかになったベーツ院長の病気については、『学院史編纂室便り』第一四号、二〇〇一年、二―八頁で紹介した。
- (2) 『関西学院百年史』通史編Ⅰ、一九九七年、五五三―五五五頁。
- (3) 『関西学院事典』二〇〇一年、二三六―二三七頁。
- (4) 『永井柳太郎』編纂会編『永井柳太郎』一九五九年、勁草書房、五六四―五六六頁。
- (5) 前掲書『関西学院事典』、二三六―二三七頁。神崎驥一「私の回想談」『関西学院七十年史』一九五九年、五五〇頁。
- (6) 日中戦争は一九三七年七月七日に起こった蘆溝橋事件がきっかけとなって勃発したが、その前史として、一九三一年以来日本が武力により中国を浸食していたことが挙げられる（平凡社『大百科事典』一九八五年、三六九―三七〇頁）。
- (7) 日記や書簡の中で、ベーツはしばしば日本語をローマ字書きしているが、(1)には *zaiaiku* と書かれている。
- (8) この表現には、当時ベーツが傾倒していたオックスフォード・グループ運動、道徳再武装運動の影響が見られる（同じような表現は他の箇所にも出てくる）。この運動を日本に広めたのは、ベーツと同じカナダ・メソヂスト教会宣教師 P・G・プライス（一八八一―一九四七）であった（加藤恭亮『世紀の希望 MRA…創始者ブックマン博士傳』一九四九年、教文館、七一頁）。
- (9) 「ベーツ先生思い出座談会」『母校通信』第三二号、一九六四年、四一頁。
- (10) 明治時代、メソヂスト監督教会 (Methodist Episcopal Church) は美以教会と称されていた。

これは清代中国において、略称のMEに当字したことに依る。したがって、南メソヂスト監督教会は「南美以教会」と称された（『日本キリスト教歴史大事典』一九八八年、教文館、一三四七頁）。

- (11) 西川玉之助「古い時代の関西学院」『関西学院六十年史』一九四九年、二〇五—二〇六頁。
- (12) 前掲書『関西学院事典』、一三九—二四〇頁。
- (13) 中村賢二郎「先生と私」、吉岡美清編『父の傍』、一九五八年、私家版、八六—八七頁。
- (14) 寥雨「中村賢二郎」「教育合同問題につき雑感」『関西学報』第一号、一九一〇年、一一九—一二七頁。
- (15) 『永井柳太郎』編纂会編、前掲書、三四頁。原清「忘れ得ぬ恩師（二）神崎先生」『母校通信』第一号、一九五九年、七頁。
- (16) 『永井柳太郎』編纂会編、前掲書、三四頁。
- (17) 中村賢二郎「母校今昔物語（二）」『母校通信』第一号、一九五三年、一三頁。
- (18) *Bates Diary*, Feb. 11 & 13, 1939.
- (19) 前掲書『関西学院事典』、二〇〇—二〇一頁。
- (20) *Bates Diary*, Sept. 17, 1939.
- (21) 「神崎驥一先生を送る」『母校通信』第四号、一九五〇年、六頁。
- (22) 前掲書『関西学院事典』、七一—七二頁。
- (23) 菊池七郎「予科開設当時の思ひ出」、前掲書『関西学院六十年史』、二六一—二六二頁。
- (24) 前掲書『関西学院事典』、七四—七五頁。亀徳一男、鮫島盛隆両氏懇談会録音テープ、一九七〇年、学院史編纂室所蔵。
- (25) 一九三九年一〇月現在の「現任教職員一覧」（『関西学院五十年史』、一九三九年、三五—一頁）に

は、配属将校として次の三名の名がある。「大学部及予科 陸軍騎兵大佐 神代菊男、専門部及高等商業学校 陸軍歩兵中佐 伊藤敬吉、中学部 陸軍砲兵少尉 久田清逸」。

(26) 前掲書『関西学院百年史』通史編Ⅰ、五四四頁。

(27) J・C・C・ニュートンの院長在任期間は、正しくは一九一六年から二〇年までの約四年間であるが、一九一七年六月から翌年一〇月までアメリカに休暇帰国している。その間院長代理を務めたのが松本益吉であった（『関西学院百年史』通史編Ⅱ、一九九八年、年表、六〇一―六〇二頁）。

(28) 讃美歌二一〇番「来る朝毎に」（『讃美歌二二』）の歌詞の一部が書かれているが、ベーツの書いた部分の訳としては、一九三二年発行の『讃美歌』六版の二番に収められている「礼拝 朝」の歌詞の四番が最も近いように思われるので、ここではそれを紹介した。原詩は John Keble (1792-1866) の “New every morning is the love” である。

(29) H・F・ウッズウォースは一九三九年二月六日、急逝した。「ハロルド・ウッズウォースは、土曜の夜に発病し、徐々に悪化した脳溢血のため、昨日午後六時に亡くなった」と、ベーツは二月七日（火）付けの日記に書いている。

(30) Meeting of the Board of Trustees, May 9, 1939, *Minutes of the Board of Directors of Kwansei Gakuin*.

(31) Meeting of the Board of Trustees, Dec. 8, 1939, *ibid.*

(32) ベーツは、ここにもローマ字で日本語を書いている。“Kirimasho”とは、「手を切りましょう」という意味だと思われる。

(33) 前掲録音テープ。

(34) 『大学とは何か 世界の大学・日本の大学・関西学院』一九七五年、三七八頁。

(35) 堀峯橘副院長は、定年後も院長補佐として残ることが決まっていたが、辞退している (Meeting

of the Board of Trustees, Dec. 10, 1938 & Special Meeting of the Board of Trustees, Mar. 8, 1939, *op. cit.*)°

- (36) 前掲書『関西学院事典』、二九二—二九四頁。
- (37) 前掲書『関西学院事典』、一九六—一九七頁。
- (38) 曾木銀次郎「回想録」、前掲書『関西学院六十年史』、二二二頁。
- (39) 河辺満甕「恩師ベーツ先生のことども—学院教育にふれつつ—」『学院を語る』一九六五年、一一頁。
- (40) *Bates Diary*, Oct. 14, 1939.
- (41) “All the Way My Saviour Leads” (Fanny J. Crosby, 1875) の歌い出し部分の歌詞である (Epworth Methodist Episcopal Church, San Francisco, California, *Sacred Songs for Church and Home*, 1923, p. 192) .
- (42) ここに出て来るオールダムは人名か地名かはつきりしないが、恐らくイギリスのプロテスタント伝道者 J・H・オールダム (一八七四—一九四七) のことではないだろうか。オールダムは、学生時代からキリスト教学生運動の指導者で、ベーツに影響を与えた J・R・モット (一八六五—一九五五) の協力者として知られる (『岩波西洋人名事典』増補版、一九八一年、三〇九頁)。だとすれば、「しかし、私はおまえに言う……」は、オールダムの言葉の引用と考えられる。
- (43) 一九三九年九月、ヒットラー率いるドイツ軍がポーランド侵略を開始したのに対して、イギリス、フランスがドイツに宣戦し、第二次世界大戦が勃発したことを指している。
- (44) C. J. L. Bates, “Reminiscences of Kwansei Gakuin Forty Years Ago and Since,”『関西学院六十年史』、一九四九年、英文二頁。
- (45) *Bates Diary*, Dec. 31, 1940.

- (46) 南メソヂスト監督教会宣教師として来日したS・E・ヘーガー(一八六九—一九五〇)は、一九〇四年から関西学院で教鞭をとり、普通学部長、院長代理等を務めた(前掲書『関西学院事典』、二八〇頁)。
- (47) 理事会記録によると、長年のベーツの功労に対し、適当な感謝の意を表することを曾木銀次郎が提案したのを受けて、その委員を具体的に決めるといふ修正案を神崎驥一が提出している。
- (48) 大石兵太郎「大学事始」、前掲書『関西学院六十年史』、二六三—二六四頁。
- (49) 中村賢二郎「母校今昔物語(三)」『母校通信』第二二号、一九五四年五月、二二—二三頁。
- (50) 『理事会記録』決議録(臨時理事会)一九四〇年七月四日。
- (51) 「ベーツ第四代院長の辞任について」ベーツ院長の手紙から明らかになったこと」『資料室便り』第一〇号、一九九九年、三一—四頁。
- (52) 『資料室便り』第二一号、二〇〇〇年、三頁。
- (53) 平凡社、前掲書、第九巻、五〇頁。
- (54) 同書、第一一巻、三三〇頁。
- (55) 前掲書『関西学院百年史』通史編I、五六七頁。
- (56) *Bates Diary, Oct. 14, 1940.* ベーツは、「[イギリス人、カナダ人と比べて]アメリカ人の動きが最も早い」とも書いている。また、M・M・ホワイティング一家は一九三九年夏に次のような経験をしている。一家が野尻湖に到着し、例年通り地元警察官の訪問を受けた際、外に明かりが漏れないよう全ての窓に黒い布をかけること、外でマッチやタバコに火を点けないことを求められた。さらに、列車内では軍事施設の前を通る際ブラインドを降ろすよう命じられた。(Florence Metcalf, *Why Japan - in 1912? 1989*, pp. 94-96)。
- (57) 『理事会記録』決議録(秋季定期理事会)一九四〇年一二月二日。

- (58) 池田裕子「ベーツ第四代院長の手紙と写真と油彩画―高山国際村（宮城県）での調査―」『学院史編纂室便り』第一六号、二〇〇二年、二一―六頁。
- (59) 池田裕子「ベーツ第四代院長宛の手紙―戦後の混乱期を生きた人々について―」『学院史編纂室便り』第一五号、二〇〇二年、八頁、（注）20。
- (60) 「アウターブリッジ先生を囲んで」『母校通信』第一七号、一九五六年、一二頁。
- (61) 坂本遼「忘れ得ぬ恩師（四）ベーツさん」『母校通信』第一三三号、一九五四年、一三三頁。
- (62) オリエンタルホテルの二六号室が御前会議が開けるほど立派だったので、こう表現したのだと思われる。実際は、訪ねて来た知人や教え子たちと、とりとめもない話をしたということだろう。ベーツは、日記や私信にこのような比喩的表現を用いることがある。七月四日付けの日記にある「ギロチン台」もその一例である。